

伝列者集採の《声》  
時代の手聞き

篠田 鈇造

## 実話という《声》

— 篠田鈇造の仕事 —

重信 幸彦

### 1 ある「声」の造形から

篠田鈇造は、「聞き書き」の人であった。

そして、古老の《声》に耳をかたむけ、さながら「幕末維新  
明治／東京生活誌」ともいべき数々の作品を残した。

たとえば幕末期の次のような体験を聞き取っている。時は文  
久、ある夜十二時近く、一人の男が四谷大通を歩いていると、  
三人の侍に呼びとめられた。三人は男を取巻き「無礼な奴だ、  
石を後蹴あとけに致したな」といいがかりをつけ、詫びても許してく  
れない。一人の侍が男の襟首を捉え、一人が手を押さえた。

「ヤツ試斬しざんだなと思つた時のヒヤツとした心持、胸はドキド  
キツと動悸ふぶきの早鐘、蒼あかくなつて寒慄ふせつちやつたんです、気も  
遠くなりまさア、耳の辺で何かガヤガヤいうから、ハツと思  
うと「君、危あやない危あやない、手を除とけ給たまい、手を……手が邪魔まじだ」  
この早口の言葉、未だに耳の奥に残つてるような気がします  
よ、つまり一人の侍がスバリ斬やろうとするんだが襟首を押さ

ええている侍の手が邪魔になるといふ一刹那、私はこれに気  
づいて愕おどろくまい事か、モ一無我夢中体にあるだけの力を出し  
て斬やろうとする侍に衝当り、矢庭に抜懸けた刀を引掠ひんもぎつて担  
ぐが逸はよいか何がなんだか一切夢中で駈出おいかす逐懸おいかける、町人の  
悲しさが相手の刀を奪いながら刃向かうどころか担いで逃  
げ出し御濠端を高力松の下から市ヶ谷八幡の所まで逃にげさせた  
が呼吸いきが切れて死にそうで、あの八幡下の泥溝どぶ（今でもあり  
ましよう）……彼溝あなの下へ潜込ひそでしまつたんです……実に命  
カラガラとはああいう時の事なんですよ（「中略」）……マア  
愛度あいどい命拾いのちいだてんで赤飯を焚たいたんですが、ナント物騒ものさわな  
もんでしよう、「手を……手を」と言つた時押さえた侍が一利  
逸はよく手を引いて御覧ごらんじろ、スパツと斬やられてしまつたんです  
……あの担かいだ刀がさ大きなツバでしたが、泥溝どぶへ置いて来  
ました、刀がさどうなりたるうて……」

これは、明治三五年七月二六日から一二月二九日にかけて『報  
知新聞』に連載された記事の一つであり、この連載は明治三八

年に『幕末百話』（内外出版協会 一九〇五）として単行本化された。ここで紹介した話は明治三五年八月一日に『報知新聞』紙上に掲載され、その後単行本化された際には「二七」話目に収録された。「引用は原則として現代仮名遣いに改めた。」

この幕末期を語る老人の〈声〉を聞き書きした篠田鈺造は、明治四（一八七二）年東京赤坂に生まれた。錦城学校を出て報知新聞社に入社。その後編集主任を経て昭和一八年まで同社に在勤する「篠田、一九五五、一五」。国立国会図書館に所蔵されている篠田鈺造による著作を、第二次大戦後の角川選書や岩波文庫による復刻版を除いて列挙すると、明治二一年に紫煙散史の筆名で書いた書生を題材にした創作『書生之先導』（鶴声堂 一九八八）が最も古く、次いで明治三五年五月に、商人の伝記書『商界の奇傑』（実業之日本社 一九〇二）を出版、そして七月末から三月末まで、『報知新聞』紙上に幕末期に関する聞き書きを連載した。明治三八年は、その連載を『幕末百話』として一冊にするとともに、「小僧」の啓蒙をうたった「小僧」出世譚の創作『通俗小僧学問』（実業之日本社 一九〇五）を発表している。

そして昭和四年に先の『幕末百話』に江戸時代の商人別荘地での暮らしについての聞き書き「今戸の寮」を加えた『増補幕末百話』（万里閣書房 一九二九）を出し、それ以後、「百話」を表題にかかげた聞き書き作品を刊行し続ける。昭和六年『明治百話』（四条書房 一九三二）、昭和七年『幕末明治女百話』

前・後篇』（四条書房 一九三二）、昭和二二年『銀座百話』（岡倉書房 一九三七）、さらに同一二年には新聞広告業の先覚者湯沢清司の一代記を聞き書きをもとに構成した篠田鈺造編・湯沢清司著『新聞業界五十五年の思い出』（広告社 一九三七）も形にした。続いて昭和十六年は『銀座・築地物語絵巻』高山書店（一九四一）、昭和十八年には「明治百話」の続編『明治開化綺談』（明正堂 一九四三）と新聞業界を題材にした『明治新聞綺談』（明正堂 一九四三）を出版している。

本稿では、数多くの篠田の著作のなかで、彼の「聞き書き」というスタイルを確立する契機になったと考えられる『幕末百話』を主な素材として、〈声〉の採集者としての篠田鈺造の実践を検討する。聞き書きという営みは、もちろん古くから行われているものであり、決して近代にのみ限られたものではない。「塚原…一九七九」。しかしこの篠田の聞き書きは、冒頭に紹介した例のように、肉声による語り口に細かな配慮をした一人称の文体で綴られていることに特色がある。今日のように録音を前提とすることが出来ない当時であって、それはかなり自覚的に選ばれた方法であると考えることができる。それを、彼が「幕末百話」の聞き書きを最初に発表した明治期の新聞という場と、そして「聞き書き」という文体を規定するとともに新聞の言葉の規定していた言文一致ということばの近代史を視野に入れながら考えてみたい。

## 2 新聞という現場

篠田が『報知新聞』に入社したのは、明治二八（一八九五）年、彼が二四歳の時であった。篠田の回想によれば当時『報知新聞』の編集局総務を務めていた村井支斎氏から入社通知のハガキが届いたという〔篠田・一九五五、一五〕。篠田に課せられた条件は「江戸っ子記事を紙面に書く」ことであり、そのため彼は「夜は友人間を歴訪。タネをつかんで、デッチあげ、紙面に綴るところから、友人知己驚いて「ウツカリしゃべられない」と敬遠されたものでした。ソコでよんどころなく慈善団体を歴訪し、趣味の方面で、万年青や、錦魚や、盆栽の諸会へ顔を出し、夏は朝顔会、秋は秋草会」と「随分苦心惨憺」することになる〔篠田前掲・一六〕。

篠田の、古老への聞き書きという実践は、新聞社に入り彼がそこで期待された役割を果たすために、試行錯誤を繰り返した末にたどり着いたことであつたと考えられる。

ところで、なぜ『報知新聞』は「江戸っ子記事」を必要としたのだろうか。それを推測するには、明治期の新聞史を検討する必要がある。篠田が報知新聞に入社した前年、明治二七（一八九四）年に、同社はそれまでの「郵便報知新聞」から「報知新聞」に改名している。この改名を山本武利は、新聞史研究の立場から「新聞史の象徴的な出来事」であつたとしている〔山本（武）・一九九〇、三六六〕。その意味を押さえておこう。

明治初期の新聞は、民権運動の勃興とともに政論を中心とし

た言論の場としての「大新聞」と、娯楽中心の「小新聞」という二つの類型のなかで展開する〔山本（武）前掲、九〇〕。「大新聞」は早期議会開設を要求する民権派新聞と、政府の政策を支持する御用新聞とにわけられ〔同前〕、後に篠田敏造が入社する『郵便報知新聞』（明治五年刊）は最初は駅逦寮御用新聞であり、駅逦寮の命令で全国の郵便局から情報を集めて掲載していたが、民権運動のなかで駅逦寮御用ではなく政論中心の「大新聞」になつた〔同前〕。

一方、娯楽中心の「小新聞」は、「大新聞」が漢文口調の論説中心であるのに対して、社会面が目立ち、「大新聞」には無い傍訓や挿絵がふんだんに使われていた〔山本前掲・一〇〇〕。そして「大新聞」の読者層は、漢学的素養を身に付けた官吏、教員、豪農、豪商といった知識人階層であつた〔山本（武）・一九八一、六七〕のに対して、「小新聞」の読者は都市部の低いリテラシーの庶民層であつた〔山本前掲・七〇―七一〕。また、この「小新聞」は、この読者層との関わりから「談話体」の文章を積極的に採用する場の一つにもなつた。それは、言文一致という文体革命の意識が「小新聞」に希薄であつたため明治一〇年を過ぎたころから漸減していく〔山本（正）・一九六五、二〇七―二二一〕が、しかし「小新聞」が、早い時期より談／声への志向を宿していたことに注意しておきた。

そして「小新聞」が地方都市などでも創刊されはじめ発展していくことと対照的に、「大新聞」は、明治一七（一八四四）

年の自由党解党や大隈重信改進黨脱党など自由民権運動衰退の影響をうけて低落傾向になり、明治一〇年代後半から、弱体化した「大新聞」を「小新聞」が追いつけることになった「山本（武）…一九八一、七六―九一」。

こうした「大新聞」と「小新聞」の歴史的展開の延長上に、明治二七年の『郵便報知新聞』の改名がある。『報知新聞』という名称になるとともに、かつて民権派の「大新聞」であった同紙は「小新聞」へ転換していく方針をとる。この改名が「新聞史の象徴的な出来事」とされた意味はそこにあった。

篠田が入社した「報知新聞」は、小説家・村井弦齋を編集責任者にすえて、まさにその「小新聞」への質的転換を遂げようとする真つ最中だったのである。そして篠田が要請された「江戸っ子記事」も、そうした編集上の戦略の一つであったはずだ。当時の報知新聞の状況について篠田自身は「村井弦齋一流の理想的家庭新聞を編集して「親子の前で読める新聞」という標語を掲げて新発足を聞き、各家庭に向かって極力宣伝に乗り出したのみならず、弦齋居士得意の家庭小説を連載して喝采を博した」「電通編…一九五五、一七」と回想する。

山本武利は明治三〇年代の『報知新聞』の読者層は、「主として中小商人の家庭」であったと分析しており「山本（武）…一九八一、一〇二―一〇三」当初から篠田が期待されていた「江戸っ子記事」とは、そうした商人層読者と無縁ではないだろう。そしてこの「江戸っ子記事」として具体的に結実するのが、後

に『幕末百話』にまどまる幕末維新时期を体験した古老たちの聞き書きの連載であった。

また、お話としての記事が、新たな新聞というメディアのなかで事実として読まれること自体が自明ではなかった。山田俊治は、「俗談平話」を標榜した代表的な小新聞「読売新聞」をとりあげ、瓦版的位置を踏襲した同紙の物語性を持つ記事が、読者と共犯しつつ「事実」として読まれるようになる過程を明らかにしている「山田…二〇〇二」。篠田の「実話」の場所も、こうした「小新聞」の歴史的展開と無縁ではない。

ここで、復刻版の諸「解説」によってまちまちの連載タイトルと期間を、もう一度確認しておこう。まず明治三五年七月二六日から「一席話 夏夜物語」が始まり、八月二七日まで総計三一回連載された。第一回目冒頭には「蚊を疵にして五百金」の夏の夜に人々の一つは持てる逸話を叩き廻れば興味深く蚊も蚤あつたものでない。少々珍なる所をお耳に入れませう」という一文が付され、連載タイトルも「なつこのよものがたり」ではなく、「蚊帳」にかけたと思われる。「かやものがたり」とルビがふられていた。そして明治三五年九月四日から十月十六日まで「一席話 秋夜物語」三二回が連載され、続いて同年十月二三日から二月二八日にかけて「老人雑話 冬夜物語」三一回（三〇話）が連載される。同連載の多くは、当時、政治評論がかかげられる箇所であった新聞第一面冒頭に掲載されており、紙面改革を遂行していた『報知新聞』の、この記事への

期待を読み取ることができる。

夏、秋、冬を通じての連載最後の話「門閥打破」は上下二回に分かれており、上が掲載された二月二十七日には次のような連載全体を総括するような一文が付されている。

「夏夜物語三十一話秋夜物語三二話冬夜物語三十八話通じて九十三話、緯は維新の前後に關し江戸東京の境目を各老人の口づから聴く楽しさ面白さ、吁されど諸老凋落、逸話多くは亦土中に埋もる、「彼の御爺さんがあると、面白いお話がありましたッけ」「さうさう老嬢さんがいなすつたら、詳しく分かるものを」と、好話終に拾い難く、逸事去つて痕なし、しかも今にして掬集せざれば、数年の後、綿々亦此恨みを繰返さざるべからず、即ち記者筆を載せて暮夜諸老を叩けり、然るに今や忙中世界となる還諸老を強いるに忍びず、されば新歳再び、「春夜物語」の稿を起すの日あらむか」（報知新聞「明治三五年二月二十七日」）

この聞き書きの連載が、「江戸東京の境目」を記すために「古老」の話を集めるという目的を自覚してなされていたことがわかる。「江戸東京の境目」とは、幕末維新から三五年経った時点で近代への変革期を対象化しようとする一つの歴史意識の表明でもあった。また、既に「聞き書き」の時期を逸しつつあるという焦燥感と使命観すら読み取れることもできる。しかし結局、最後に再開を匂わせていた連載「春夜物語」は実現しなかった。

### 3 〈声〉という方法

篠田の聞き書き記事「夏夜物語」の連載が開始された明治三五年七月二十六日の『報知新聞』紙上に、「です」「ます」調で綴られた記事は皆無に等しい。「職業案内」欄は「男女内外人を問わず何人にも出来る簡易なる時間随意の好職業あり……」、「雑報」欄は、「……満洲條約は七月一日を以て批准交換を了したりと清人側に噂あり其の筋には未だ公報達せずと云う」、そして三面記事は「……付近出火の事は特派社員の報告に依り前号に詳記せしが尚昨日に至り分明せし事柄を左に記さむ……」といった具合であった。この中で、篠田の聞き書きの文体は、敢えて選ばれ造形されたものであった。

すでに明治一〇年代後半より田鎖網紀が考案し若林珣蔵らが発展させた速記が広まり、田朝の『怪談牡丹灯籠』など速記出版が人気を博すなど、〈声〉を書き留める仕掛けが「口語」と書き言葉を接近させ始めていた。篠田が、聞き取りに速記を使用したか否かは定かではないが、少なくとも口語を文字へ「写す」ことの効果は、認識していたと推測できる。そしてまた新聞紙面で毎回一段半前後の長さにとめられた連載が、速記などの「声」の記録を微調整した程度で記事化したものでないことは明らかであり、意識的にそれぞれの〈声〉のたがずまいを文体として造形していたと考えられる。造形というのと、「語られたまま」でないことが非難の対象となるかもしれないが、「語られたまま」を絶対化する感覚は、むしろ高性能の録音技術が

生み出したものであるというべきだろう。その感覚は、一方で聞き書きの「書く」という行為を単なる翻字化作業という透明な位置に閉じ込めてしまいう危うさをはらんでいる。

聞き、そして書くという実践は、あくまでも巧みな編集と構築の過程に他ならない。

篠田敏造自身が、人の話を聞くことに対する自らの傾斜と態度をどのように自覚していたかは、彼の「私の実話主義」という文章に記されている。篠田が「ナマの話、名づけて「実話」」に興味を持つようになったのは、十七歳の時（明治二十一年）に理髪業を営む篠田賢七のもとに預けられ、その時「壁一重隣の理髪場から、問わず語り」に漏れてきた「世間噺、浮世話」に「聞き惚れ」たのがきっかけだった（篠田・一九三二→一九九六、一四）。そしてそこから、篠田の言葉によれば「実話の気分」を重視する「実話主義」ともいえるべき態度が生まれた。「実話の気分」というものは、その話を一種の膜に包んで聴いているうちに、何とも言えない味がある。まず自家陶醉を感じ、ソレを文字に写すにあたって、ソノ気分が読者に以心伝心しなくてはならない、といった「実話」聴取の習性は、難有いことには、全く賢七床の壁一重の書斎で、神から授かったとでもいいたいように、会得してしまっただけです。」（篠田前掲、一五）

この「実話の気分」を、（口承）研究の文脈で翻訳して読み取っておきたい。「一種の膜に包んで聴いているうちに、何とも言

えない味」がある、と表現していることは、我々が「上演の場」という概念で捉えようとしてきた「声の現場性」という問題と重なる。語り手と、聞き手としての自分の身体が関わる現場全体が「話」を支えていることをとらえ、そこに聞き手が「自己陶醉」する主体として位置づけられる。篠田は、「文字に写す」にも「ソノ気分」が伝わらねばならないとし、それが語り手と聞き手の関係性が刻まれた一人称の（声）として造形されることになったのである。

当時、（声）を、語り手の一人称の言葉として文字化するとは、決して当たり前ではなく、言文一致という言葉の近代史のなかに位置づける必要があるだろう。それは、先に触れた語り芸を速記して文字化する試みなど、幾つかの試行錯誤を通して次第に可能になった。つまり「口語体」が成立することや、明治二〇年頃から使われ始めたという感動詞、問投助詞などに付随する「……」といった文章符号の開発（山本（正）一九六五、九）が必要であった。特に「口語体」がしばしば「です」「ます」「だ」「である」など文末処理の問題として現れたことは、篠田が名づけた「気分」と無縁ではない。それが、複数の聴衆に対するものか、一人の受け手に対するものか、敬語を使う関係か否かなど、語り手と受け手の関係性を造形する工夫でもあったからである（山本（正）一九六五、二一—三二）。そして篠田が多用する「……」という符号は、話題の中断・転換、また省略など談話ゆえの展開を可視化する効果が

あり、文字化できない言外の意味や話者の逡巡など、〈声〉の現場性を捕捉する仕掛けである。その意味で、篠田の聞き書きの文体は歴史的産物であった。

ここで、篠田の〈声〉の造形の具体例を見ておこう。一つ目は、安政の大地震の体験を語る「大昔の話安政の大地震」の一部である。

「男女三人連れで……寄席が刎ねまして阪本から帰る途中でございまして、大地がゴトンゴトンゴトンという持ち上がりようオヤツと愕いて向かいの家並を見ると軒が貴君、バクバク離れて口を開いている内グラグラグワラグラという天も地も覆り碎けてしまうような有態ありさま、どうして起つてなんかいられるもんですか、パタパタと倒れる、丁度目の前を吉原へ往く威勢のよい駕籠があつたんですが駕籠昇共々コロリ打倒れたのは仰天しましてございまして、居すくまつてしまったんで……」（『報知新聞』明治三五年八月一七日掲載）

大地が揺れた瞬間が、オノマトペを用いヴィヴィッドに語られる。そして「貴君」と語り手が眼前の聞き手に呼びかけ確認を求める言葉が挿入され、語り手と聞き手の関係性が際立たせられる。新聞掲載時には、読点は付されているものの句点は無い。日常談話の〈声〉の流れは、意味内容に規定される句点より、息継ぎの読点のみで整えられるほうが現場性に近いと言えるだろう。また「略」のような有態、どうして起つてなんかいられるもんですか、パタパタ倒れる」の一節などは談話ゆえの省略

や倒置が造形されている。

もう一例は、「夜商人」として路上でしるご屋をしていて「南部様」の行列に鍋を蹴飛ばされ顔に火傷の跡が残った男の話からである。

「ハイ私は本年七十八歳でございます、ハイハイこの左の眼の上の大火傷でございますが、ハイ是は詰りませんこと……アトでお話いたしますがソレに就いて昔のお話と申せばマツ夜の大名の行列でございますな、」（『略』今に南部様と聞くとあの時の事思い出します随分乱暴なお話でございますハイハイとうとう扇動おだてに乗つてお話してしまいました御内密御内密」（『報知新聞』明治三五年九月二二日）

「ハイ」「ハイハイ」という言葉は、聞き手からの問いかけに対する応答の言葉であり、また談話の調子を作り出す語り手の口癖でもある。こうした「声の現場性」を捕捉する仕掛けが「実話の気分」をかたどっているのである。

#### 4 匿名化された語り手と〈声〉の発見

ところで、夜商人の汁粉屋の談話の最後が「御内密御内密」で結ばれていることは、何を意味しているのだろうか。篠田の聞き書きが、語り手の素性を伏せていることを後世の解説者たちは一様に残念がるが、紀田順一郎は、当時の他の聞き書き類がいずれも話者名を記しており、その匿名化は篠田の「信念」ではないかとしている（『紀田…一九九七』）。

篠田の幕末・明治維新时期を対象とした聞き書きの語り手が匿名にされていることは、一つの作為であった。新聞連載中、明治三五年七月三二日に掲載された、江戸勤番時の狼藉を告白し「終の長のお暇となりました……懺悔ですから姓名は眞平まっぴら」という「江戸勤番むかし懺悔」の話者に対して、八月二日の投書欄に読者から「夏夜物語むかし懺悔姓名を被仰い隠すと懺悔になりません（以下略）」と寄せられていた。しかし篠田は、九月三十日の連載の末尾に、話題の提供を読者に募る一文を付した際、「（略）以前は秘密なるも当今となりては別に秘すべき事柄ならぬ維新前後の昔話御洩し下されたく維新通俗史の最大材料と考ふ御通報あれば夜分夜分参趣拝聴すべし但氏名は一切秘密とすること勿論とす」と記した。「氏名は一切秘密」は、一つの態度であった。

歴史家・小西四郎が指摘するように、篠田の聞き書きは幕末維新时期の江戸・東京生活の諸相を聞き取るだけでなく、「江戸幕府支配機構の内部腐敗」を体験者や当事者から聞きだしている「小西…一九六九」。「江戸勤番むかし懺悔」（七月三二日掲載）、「將軍の御召料御茶壺」（八月一日掲載）、「御茶壺の御付旅日記」（八月一九日掲載）、「袖の下時代御数奇屋坊主」（九月三〇日掲載）、「旗本の制裁小普請入」（十月二三日）などは、幕府や武士の腐敗ぶりを語る話であり、また冒頭に紹介した「試し切り」の話や、大名行列に火傷を負わされた汁粉屋の話、そして將軍に対する悪口に相槌をうったために拷問にかけられたと

いう「公方様悪口の祟り」（一月七日掲載）などは、庶民の側から武家の横暴を語ったものであった。それらは「氏名は一切秘密」という方法により発見された〈声〉であった。

これらの聞き書きが具体化された明治三五年は、幕末維新当時に若者であった人々が老境を迎えた時期であり、また鉄道や軍隊、学校そして憲法など、近代的制度の骨格がほぼ出来上がり、江戸という時代が記憶として想起し直されうる時間的距離感が出来つつある時代であった。東京帝国大学史談会が旧幕府関係者の証言を集めた『旧事諮問録』がまとめられるのが篠田の聞き書きに先立つ明治二四年から二五年にかけだった。そうした時代のなかで、幕末明治維新时期の生活を無名の人々の側から再発見していく実践として篠田の聞き書きが行われ、幕末期の武士であり幕府関係機構の墮落と腐敗の記憶を語る〈声〉をも掘り起こすことになった。そして、話者を匿名化した篠田は、相対の談話の場で洩らされる固有の経験を語る一回限りの〈声〉を文字化する、「実話」という方法の政治性を自覚していたのである。

さらにこの幕末維新の聞き書きが明治三八年にまとめられ、再度それが復刻されるのが戊辰六十周年にあたる昭和三（一九二八）年を経た昭和四年であり、多くの明治維新関連の出版物が刊行され、幕末維新时期が一つの歴史として意識化された時代でもあった「小西前掲」。篠田の聞き書き作品群の刊行はそうした時代に棹差していたといえる。

また、その時代は、郷土研究という名のもとに民俗学が展開する時期と重なっている。しかし管見するところ篠田の仕事は、民俗学の周辺で言及されることはほとんどない。それを単にジャーナリズムの実践であったから、と片付けるのであれば、「口承」という問いの可能性を狭隘なものにしてしまうだろう。

そもそも篠田の聞き書きは、「口承文芸から（口承）」という問いへと新たな地平が拓かれ、世間話というジャンルの再定義、オーラル・ヒストリーや「経験譚」「生活譚」への着目など、「（口承）」という概念の問い直しと対象領域の拡大がなされ、初めて出会う位置づけることができる実践とすべきなのかもしれない。昭和初期に郷土研究として具体化されていく実践と、この篠田敏造の聞き書きが、どのような点で接合し得るのか、それは改めて民俗学ならびに（口承）研究を、広義の〈声〉の採集に関わる諸実践の歴史的展開のなかに位置づけ直して考察する必要がある。（口承）という問いが民俗学的思考と深くどう切り結ぶか、それは未だ今後の問題としてあり続けているからである。

### 参考文献

紀田順一郎「解説」（篠田『幕末明治女百話』 一九九七 岩波文庫所収）

小西四郎「幕末百話」によせる」（篠田敏造『幕末百話』 一九六九 角川書店所収）

篠田敏造『幕末百話』一九〇五 内外出版協会

篠田敏造「序文」（篠田『増補 幕末百話』一九二九 万里閣書房↓一九九六 岩波文庫所収）

篠田敏造「私の実話主義」（篠田『明治百話』一九三一 四条書房↓一九九六 岩波文庫「上」所収）

篠田敏造「報知の断面史」一九五五（一九五五 電通編・発行）鈴木均「ジャーナリストの聞き書き…明治維新と戦後昭和」（『思想の科学』一一一号 一九七九 思想の科学社）

塚原鉄雄「日本の書物における聞き書きの伝統」（『思想の科学』一一一号 一九七九 思想の科学社）

電通・編発行『五十五人の新聞人』一九五五

森まゆみ「聞き書きの神様」（篠田『明治百話 下』一九六六 岩波文庫所収）

山田俊治『大衆新聞がつくる明治の（日本）』二〇〇二 日本放送出版協会

山本武利『近代日本の新聞読者層』一九八一 法政大学出版局

山本武利『新聞記者の誕生』一九九〇 新曜社  
山本正秀『近代文体発生の史的研究』一九六五 岩波書店

（しげのぶ・ゆきひこ／北九州市立大学）